

## 口頭弁論要旨

原告 太田歩美

私は、太田歩美と申します。日本全国では、福島第一原発事故に関して1万人以上の方が国と東京電力への損害賠償を求める裁判を起こしています。私はそのうち大阪地方裁判所で提訴している集団訴訟の原告240名のうちの一人でもあります。近畿エリアでは、京都・兵庫・関西と3つの訴訟があり、合計すると500名以上の原告となっています。

福島第一原発事故により、原発から半径20キロ以内を中心とする地域が避難区域と指定されました。しかし実際には避難区域外の避難者がたくさんいて、いまだに避難を続けています。避難区域は、安全性が確認されないまま次々と解除されていますが、避難区域が解除されても避難者が戻らない状況が続いています。特に区域外避難者はほとんど賠償らしきものを受けておらず、そのような避難者が特に関西地方にたくさんいます。

福島第一原発が爆発した約8年前は、私は生まれ故郷である茨城県水戸市で、当時小学1年生の娘と、父、弟と4人で暮らしていました。

地震当初は、水道・ガス・電気とライフラインが全部止まり、食料やガソリン手に入れるために必死だったのですが、そんな中、偶然通じた知人からの電話で原発が危ないということを知り、避難することにしました。知人からの電話では、アメリカは自国民で日本に滞在している人たちに80キロ圏内から避難するよう指示しているというのです。当時福島原子力発電所からの茨城県の我が家までの距離など知りませんでした。80キロなら我が家も距離的に近いと考えたからです。

家族内では父からは「政府が大丈夫と言っているのだから大丈夫だ。それなのに避難するといふのであれば二度と戻ってくるな」と怒鳴られ、泣きながらの口論になりました。

地震・事故から6日後に私は娘と二人で鹿児島県に避難しました。放射能も地震もなく、水道水が蛇口から出て、ガスコンロの火も点き、夜も電気の灯りをともすことのできる安全な土地で数ヶ月暮らし、少し気持ちが落ち着いた後に、過去の放射能事故等について調べ始めると、いろんなことが分かりました。空気の汚染だけでなく、土にも放射性物質が落ちて染みこんでいくこと。その土で作られた農作物を食べると、それが体内から放射性物質を出し、内部被曝

というものを受けるということ。原発事故後、政府が食品の安全基準値自体を上げたこと。その上げられた基準値をクリアした食べ物が流通していること。

仮にこれらのことが原因で将来病気になったとしても因果関係の証明は難しいでしょう。放射性物質は遺伝子に影響するので、娘が子どもを産んだとしてもその子にも影響があるかもしれません。

そのようなことを知ったため、茨城県には帰らず、長期避難することを決意しました。そのため、元の仕事は辞めざるを得ず、新たに仕事を探すため、大阪に避難先を変えることにしました。仕事のみならず、今まで茨城県で積み上げてきた人間関係も家も捨てざるを得ず、一度リセットしての、全てが一からのスタートです。生活を何とか立て直すために資格を取ろうと学校へ通ったり、そのために借金をしたりしているので、生活は今でも苦しいです。

茨城県に居たら、建てた家もあり、収入が少なかったとしても何とかやっていけました。それに、子どもが熱を出したりしたとき等、父や弟が私と一緒にになって子どもを世話してくれていたのも、私は外で働くことができていたのです。

何より、私の父や弟と日々の生活を一緒に過ごせないのが辛いです。事故当時小学1年生だった娘はもう高校1年生です。もうその時間は取り戻すことはできないことは頭では分かっていますが、私の子どもの日々の成長を、父や弟と一緒に見守り、助け合いながら過ごしたかったです。茨城県のあの家で父や弟と暮らす日々に戻りたいです。朝「行ってらっしゃい」「ってきます」と互いに言い、夜には晩御飯の食卓を4人で囲み、その日あったことをそれぞれ話し、その晩のお風呂に誰が先に入るか話したりするような、普通の生活に戻りたいです。そんな些細なことと思われるかもしれませんが、けれども自分にとってはとても大事な日々の生活でした。それらが奪われたことがただ一重に辛いことです。

また、大阪では茨城県からの避難について理解されませんでした。大阪の人に「茨城県（からの避難）なんて、福島（県）にのっかってるだけやろ」と言われたこともあります。なので、自分が原発事故の影響を恐れての避難しているということは、普段の生活では言わないできました。思い出して説明するだけで精神的に辛くなるし、説明したところで、理解されるのが難しいということには分かっているからです。

福島県と茨城県との県境に壁があるわけではないです。現実に原発事故当初に何の被害もないと言われていた茨城県の北茨城市では、1592人に1人と

小児甲状腺ガンの発生率が高いことが分かりました。原発事故前までは、100万人に0～3人の発生率と言われたにもかかわらずです。事故後は桁違いの発生率です。それでも公式には「甲状腺ガンの原因については福島原発事故の放射線の影響は考えにくい」と発表されています。このような発表を私は信じることができません。現に私と子どもは甲状腺検査でA2という判定が出ており、定期的に検査を受けています。

さらに茨城県の実家で使われていた掃除機のコリを採取して専門家に測定してもらった結果、セシウム137が1キログラムあたり2830ベクレルという高い数値が出ました。事故から7年経った時点の昨年のことです。その土地に父や弟、親類縁者、友人たちが住んでいることを思うと、彼ら彼女らの身体が心配です。自分たちだけ逃げて本当によかったのか、もっと粘り強く説得すべきだったのではないかと、後悔の気持ちがぬぐいきれません。

私の現在の避難先である大阪市は、大飯原発から95kmです。

茨城県にある私の家と福島原発との間は130kmでした。

皮肉なことに現在の方がむしろ8年前より原子力発電所との距離は近くなってしまいました。距離が全てではないと分かっていますが、近いのはやはり怖いのです。

もし大飯原発で何らかの事故が発生したら、また避難しなければならないでしょう。しかしもう今の私には新しい土地でやり直す気力・体力はありません。いくら健康が大事と言ったって、人間はそれだけで生きていける訳ではないことを身をもって知りました。原発事故以前に母が難病を長く患ったうえで亡くなっていることもあり、健康はお金では買えないし、万が一病気になって苦しい思いはしたくないし、子どもにも痛い苦しい思いはさせたくないと思って、避難を決意しました。「健康を守るための避難」という自分の選択は間違っていないと今では思っています。

しかし、縁もゆかりもない土地で一から始めることの辛さは、もう十分味わいました。

健康であったとしても、お金がない、仕事がない、頼る知り合いもない生活がどんなに不安で心細いかを、知りました。

自分は一生そこに住むつもりであった場所に帰りたくたいです。しかし放射線管理区域以上の値が出ている土地には、帰りたくてもやはり帰れません。

一度ばらまかれた放射性物質を元に戻すことはできません。自分たちで管理制御しきれないものを持つべきではないと思います。

裁判所には福島原発事故の結果、福島県のみならず近隣の自治体にも被害があったことを知って頂きたいです。そして、知った以上、このような思いをする人を二度と出さないために今後どうしたらいいかを一緒に考えてほしいです。それは原子力発電所が54基もある日本ではないはずで